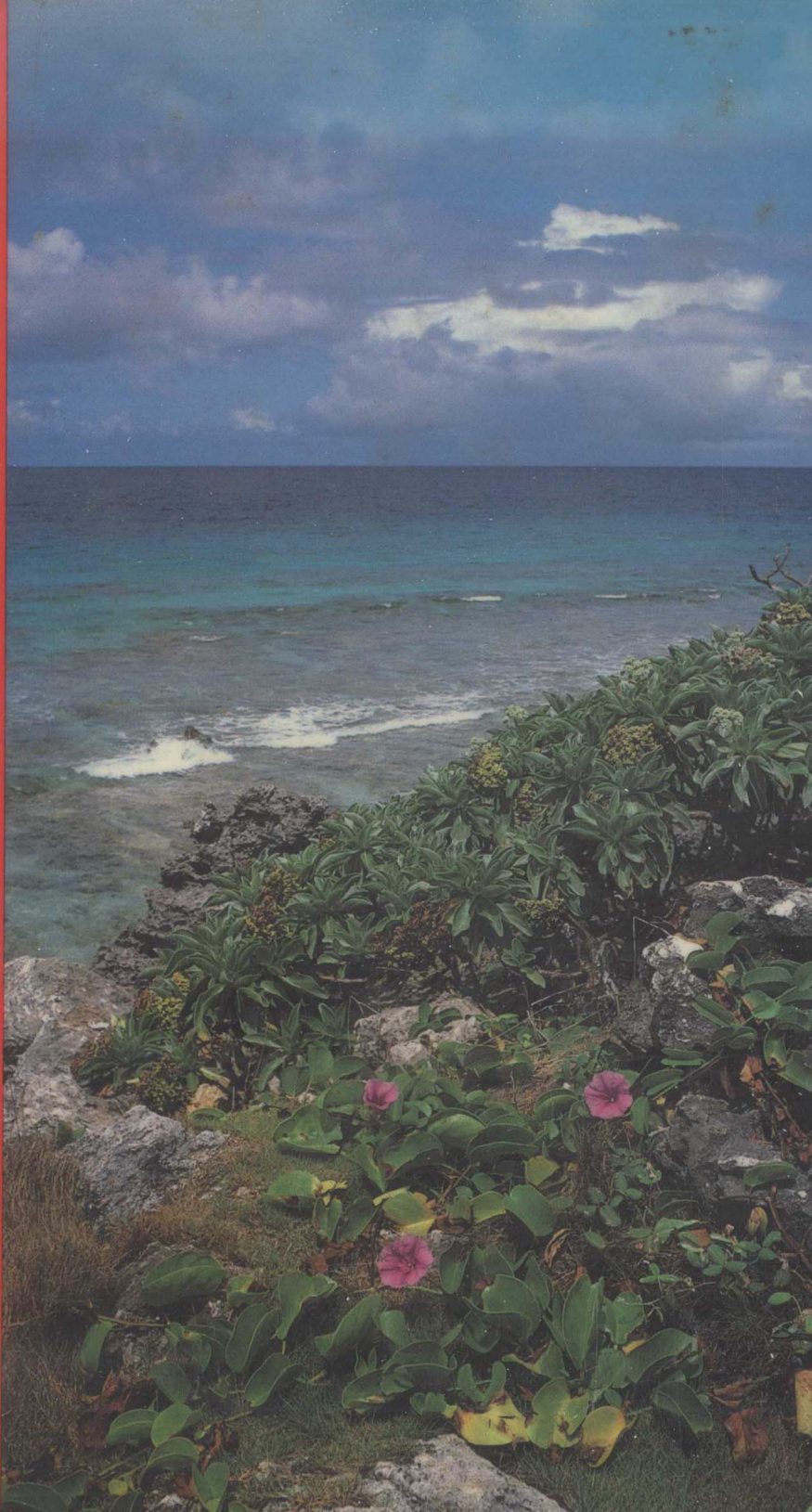


沖縄に燃えるいのち...

鉄血の島

池上金男

東洋堂
企画出版社



鉄血の島

池上金男

東洋堂企画出版社

鉄 血 の 島 —沖繩に燃えるいのち—

昭和60年8月15日 初版発行

著 者 池上 金男

発行人 尾関とよ子

発行所 東洋堂(株式会社東洋堂企画出版社)

東京都新宿区本塩町21番地広瀬ビル

電話 03 (235) 6681(代)

振替 東京3-86099

印刷所 株式会社上野印刷所

製本所 株式会社宮田製本所

Printed in Japan・落丁乱丁本はお取替えいたします。

●
鉄
血
の
島
—
目
次

第一部	八重の潮路	5
-----	-------	---

第一章	占領下の島	6
-----	-------	---

第二章	大陸の残照	123
-----	-------	-----

第二部	鉄血の島	235
-----	------	-----

第一章	戦雲急迫	236
-----	------	-----

第二章	戦闘発起	287
-----	------	-----

第三章	島北の戦闘	327
-----	-------	-----

第四章 血戦嘉数高地 362

第五章 敵将を討つ 410

第三部 風蕭蕭……………449

第一章 慰霊行、ふたたび 450

第二章 戦後変転 479

第三章 返還への道程 507

第四章 運命のとき 542

あとがき 580

第一部

八重の潮路

第一章 占領下の島

(1)

昭和二十三年、十月。

鉛色の空が、南西諸島の海を覆っていた。

風が強い。

海面すれすれに、雨脚の幕を下げた黒いちぎれ雲が走る。

波が荒い。

ゆうべからの時化^{しけ}はおさまりかけていたが、依然として三角波が白馬の競いあうように碎け散る。

その海に、百五十トンたらずのボロ機帆船が揉まれ続けていた。

南西諸島の海は、もう日本のものではなかった。

三年前、

数百万の鮮血を流して戦った大東亜戦争は、日本の敗北で終わった。

その結果、日本は明治以来獲得した海外権益のすべてを喪失したばかりでなく、領有していた朝鮮半島、

台湾、樺太島南半、千島列島を放棄したほか、北方四島をソ連に武力占領され、小笠原諸島と、北緯三十度以南の南西諸島を、米国の施政管轄権下にゆだねた。

南西諸島のうち、日本の施政下に残っているのは、種子島と屋久島を含む大隅諸島だけである。九州の端からわずか百二十キロ南下すると、もう他国の海だ。薩南諸島、奄美諸島、沖縄諸島、先島諸島^{さきしま}、みんな失った。

その海を、機帆船が行く。

ペイントを塗り直す時期はとうに過ぎた赤錆だらけのボロ船だ。

船尾にひるがえる国籍旗も日の丸は許されない。信号旗一旗^{りめう}である。

戦争に負けるというのは、これほどみじめなものか、何もかも情けない有様だった。

「おい、針路がずれとる」

ブリッジ^{ブリッジ}の船橋へのっそり上がってきた髭面の船長は、舵輪^{ホイール}を握る操舵手^{オペレーター}の若い男に鋭く声をかけた。

操舵手の高原は、あわてて羅針盤^{コンパス}を覗きこむ。

「右 舵、十五度」
スターポート

船長は、吐きだすように野太い声で命令を下す。

「右 舵、十五度、サー」
スターポート

舵輪が、カラカラと回る。

「ポート・イージー」

「ポート・イージー、サー」

高原は、舵輪を左に修正した。

「舵中央」

「舵中央、サー」

「ようし、この辺は潮が速い、風向きだけで修正していると、とんでもないほうへ流されるぞ」

船長は、語気を柔らげて高原に言う、船橋から甲板へ下りて行った。

船長の^{おひなたぶいち}大日向武市は、戦前北米カナダ航路の貨客船の船長だった。それが開戦直後、船と共に軍に徴用された。

船長という職務は、船で絶対的な権限を持つ。それが軍の輸送船になると、その権限が崩れた。船長の上に立つ輸送指揮官が命令権を握っていた。

軍の輸送指揮官が、せめて海軍々人だったら、まだがまんの上もあつたろう。あいにくそれは陸軍の予備役大佐だった。船にはまったくのしろうとに、船橋で一々文句をつけられて、大日向船長の勘忍袋の緒が切れた。彼は航程半ばの廈門^{アモイ}で辞表を叩きつけると、船から姿を消した。

軍に徴用された身が、任務を途中で放棄したことに対する免罪処置は特務機関が引受けてくれた。大日向武市は船長免状を取り上げるには惜しい腕を持っていた。それから終戦に至る数年間、彼は中国沿岸を往き

来する不定期貨物船の船長で過した。その時期、彼がどんな禁制品をどこからどこへ運んでいたか、記録にもなければ知る者もない。そのころの生活を物語るのは、右の耳のつけ根から口のすみにかけての傷痕だけである。陽灼けた顔にひととき目立つ白い傷痕には、無言で人を威圧する凄味がある。

戦争が終って、上海からトランク一つで引揚げてきた大日向は、そのトランクに隠した金でボロ機帆船を買入れた。

彼はその機帆船で、できるだけ外洋に出ようと決心した。そこで始めたのが沖縄通いの航海だった。彼は沖縄占領の米軍に交渉して必要物資の輸送を請負った。

沖縄の米軍が彼に発注したのは、食用牛の運搬だった。終戦直前の沖縄戦で沖縄全島の家畜は全滅状態となった。食糧の大半を本国から運ぶ米軍は、新鮮な食肉の供給には不自由していた。船で運ぶには時日がかかりすぎるし、空輸するには莫大な経費を要する。

大日向の機帆船が、九州から沖縄へ食用牛を運び始めてから、もう三年近くになっている。

「司^{シチヨウジ}厨^{チュウ}長、昼飯は何を食わすつとか」

九州に住みついて三年、大日向の言葉もだいたい九州弁になっていた。

「米が足らんですけん、また芋飯で下さい」

狭い調理場で、司^{チーフスチユワード}厨^{ユワード}長の柳田がぼやく。

「ま、飯が食えるだけでもましじゃ、唐黍^{とうきび}のパンには閉口するけんう」

終戦後、三年たっても日本の食糧事情は一向によくならなかった。一日一人あたり二合三勺（345g）にきめられた配給量も、白米は半分も渡らず、大半は水っぽいさつま芋や、高粱、大豆などの雑穀を米に換算して配給する始末だった。

なかでも、アメリカからの救援物資の玉蜀黍粉^{とうもろこし}には誰も悩まされた。カチカチに乾燥した粗挽きの粉は一種異様な匂いと、煮ても蒸してもザラついてなじめない舌ざわりで、食物としては最低だったといえた。それも無理はない。実は家畜の飼料用のものだあとでわかった。

「ときにお客さんはどげん様子だ」

大日向船長は声を低めて訊ねた。

「ゆんべからの時化でへたばっとりますたい。おおかた飯はいらんじゃろう思います」

柳田司厨長は、ニヤリ白い歯をむきだしてみせた。

ガランとした船艙の片隅に藁蓆を敷いて、四、五人の男たちが蒼い顔でうずくまっていた。

いずれも三十代半ばの屈強な男たちだった。栄養不足気味はこのころの日本人の通り相場で、痩せてはいがこの男たちは鍛えあげた筋骨を持っていた。それにどの男も意志の強さを物語る鋭い眼をしていた。

その代表的な面構えが、リーダー格の男だった。彼はほかの者と違って、船艙の中央にどっかと坐っていた。安座というのは当然ない。牛繋ぎ棒に胴体をくくりつけていたのである。

いまは空荷だが、いつもは牛を繋ぐ船艙の中は、獣の匂いがむつと鼻につく。そのリーダー格の男の前には、縦横一・二メートルほどの木箱が置いてある。

「杉岡、そろそろ縄を解いてくれんか、窮屈でかなわん」

船酔いで蒼い顔の男たちの中から、三十前後の男が、氣力をふるい起して歩み寄ると、リーダー格の背後へ廻って、縄を解きにかかった。

「やあ、だいぶこたえた様子ですな」

船艙へ入ってきた大日向船長は、氣の毒そうに一同を見廻した。

「この連中、船ははじめてなんでね」

リーダー格は、苦笑してみせた。

「それじゃ尚更だ、ゆうべの時化は船乗りのわれわれにも少しきつかった」

大日向は、自由になった腕を大きく屈伸させているリーダー格に、軽い驚きの眼を向けた。

「それにしても、あんただけは元氣ですな。松本さん」

松本と呼ばれたリーダー格は、また苦笑いした。

「いや、正直なところ私もこたえた。だが無理を頼んで船を出した手前、弱音は吐けんのでね」と、いいながら、前の木箱を眼で示した。

「それに、これのお守りがある」

「いったい、それ、何ですか」

大日向に続いて、船艙に顔を出した柳田司厨長が、好奇心をまるだしの顔で問いかけた。

「余分な人間ば、一人も乗せちゃらんこん船で、夜っぴて見張つとらにや氣がすまんとは、いったいどげん

物が入っとるんですかの、いっちょ教えてやらんですが」

「シチヨウジ司廚長」

大日向が、きびしい顔でたしなめた。

「こん人たちはな、目的地に着くまで一切訳を訊かれとうない、そういう約束で船は借り切られたとじゃ、そんな男の約束は忘るるな」

柳田が首をすくめるのを見て、松本は破顔一笑した。

「船の乗組員としたら、積んでいる荷物が気になるのは当然だ。しかし、怪しい品でもなければ物騒な物でもない。ただの石だよ」

「いし？　というと？」

「そう、何の変哲もない石のかたまりだ」

その会話に、大日向船長が何か言葉をさしはさもうとしたとき、頭上の船橋から操舵手の高原の声が聞えた。

「ヤブデン船長！　米軍の哨戒機が近寄りまーす……」

「おう、いま行く！」

大日向はそう怒鳴り返して、踵を返した。

松本もそのあとに続いた。

雲高は五、六百メートル、雨もよいのその下を這うように哨戒機が飛ぶ。コンソリデーター・B24、通称リベレーター、第二次大戦中に活躍した戦略爆撃機である。

リベレーターは、機帆船の周囲を二度三度と巡回して正体を確かめたあと、機首を南に転じた。

「吐噎^{とが}喇^ら（列島名）へさしかかると、きまって来よる、いまだき日本の船なんぞめったに無かどじやろうに」
そう呟く操舵手の高原に、船橋へ登ってきた甲板長の中山が応じた。

「そいだけ神経ば尖らしちよるいうことよ、沖縄はアメリカさんの極東随一の戦略基地じゃけんになあ」
「船長^{ナフテン}」

船橋で、大日向と肩を並べた松本が呼びかけた。

「なんですか」

「悪石島^{あくせきしま}の沖に差しかかったら知らせてくれんか」

そういつて松本は船橋を下りて行く。

「悪石島？」

「そうだ、頼んだよ」

にっこり笑いかけた松本の顔が下に消えた。

「……」

松本の、精悍な風貌に似合わぬ優しい笑みが、大日向に強い印象を与えた。

深夜——午前二時。

機帆船は吐噶喇列島悪石島沖を通過した。

船酔いに苦しんでいた松本ら五人は、暗い甲板に出て整列すると、しばし黙禱を捧げた。

松本は、用意した弔辞を読み上げた。精一杯張り上げたその声は吹きすさぶ潮風に散って、船橋で見守る大日向たち乗組員の耳には届かない。

——この沖で沈んだ者の身寄りだろうか？

拝礼の後、海へ投げ入れた目も彩な花束が暗い波間に瞬時に消え去った。

(2)

二日後。沖繩、那覇港。

米軍港灣司令部は、占領後はいじめての、思わぬ難問題に頭をかかえこんだ。

原因は、大日向船長の機帆船だった。

その船は、米軍の発注で生糧を運搬する船だから、入港を許可することに問題はない。

検疫は、港外で行なうのが通例である。だが沖繩は、米軍の占領下にあるといっても、元々日本本土の一部である。その本土から沖繩へ月に二度三度と往復する大日向の船は、手続きが簡略化されて、岸壁に接岸後に検疫と入国手続きが行われることになっていた。

その大日向の機帆船が接岸した。